

やる気を起こせば、必ず奇跡が起こる

鹿屋市串良町柳谷公民館 館長
豊重 哲郎さん



◆数字で物が言える集団をつくる

私には絶対に忘れられない出来事があります。「哲郎、ありがとう」と反目者が声をかけてくれたことです。そのときの感動は一生の宝です。地域づくりでは犠牲者を出してはいけないということも、その人が教えてくれました。

私が大切にしていることは「無視」という状況を作らないということです。無視によって犠牲者は反目者になってしまうからです。

小さな細胞が一つずつ増えていくと、立派な筋肉ができたり、円満な言葉が感動に伝わったりします。「慌てるな、急ぐな、目的に近道するな」というのが、私が館長を引き受けた15年前に思ったことです。そして、2年間で人を動かすことができなかつたら、館長を辞めようとは私は宣言したのです。

私は若い頃、銀行におりました。銀行では1円からすべてが始まります。残高が1円でも合わなかった時、どこが間違っているのかを調べるために徹夜したこともありました。だから1%の力の偉大さというのが私には身に染みて分かっていました。1円でも1人でも、それは偉大な財源だということです。

数字で物が言える集団を作らなかつたら、疑われる。だから、私の組織は、企業会計原則を基本にしてやっています。まず帳簿管理ができて、総会では必ず決算の数字が合っていなければならない。行事評価も行事だけではだめです。

また、補助帳的な感覚の組織づくりでは、元帳を見られるリーダーをつくらなければいけないと後継者が育ちません。すなわち元帳とは総勘定元帳で、字のごとく、その下には補助帳がありますよね。顧客名簿、労務管理帳簿、売掛金、買掛金、原価計算など、元帳を説明する補助帳が充実していなかつたら、貸借対照表、損益計算書までつながっていかないので、どんぶり勘定になっ

てしまいます。せめて単式でもいいから、毎日収支メモをとって整理をつけていくと、後継者はそれに則っていく。企業会計原則の2つ目は、総勘定元帳はオーナーが見るぐらいで、^{*}やねだんでは補助帳のところに高齢者部を位置づけたり、青少年対策部を位置づけたり、事業部や畜産部や文化部や高校生クラブというのを補助帳に代替しています。そうすると年齢に関係なくみんなの出番が必ずあります。すなわち、銀行帳簿という資本金です。つまり、やねだんの場合は資本金とは汗なのです。財源は人、会社の場合は授權資本とか増資とか、資本金は金なのです。要するに、会社の利益を考えたときに、資本金の回転率をどうやってうまく使っていくか、これが経理部長の仕事なのです。やねだんの場合は、1つの補助帳的な高齢者部には、部長、副部長、会計、監事が2人いますから5人の役員がそれぞれ独立採算をとっているわけです。組織というのは、思いつきでものを言ってしまうと、オーナーや会長が交代したときに、あいつのときは良かったけれど、今度はだめだなとなってくる。ですから、私は1つ目に2年間企業会計原則に従った組織づくりをして、2つ目は1%の反目者をチェックしてきました。

◆結がなくなってから・・・

昔でいう結は、今でいう協働です。昔は一人でやる農作業にも限界があるからみんなで結をして、終わったら次は誰々の手伝いしてやるよという時代だった。だけど、機械化が進んでから結がなくなって、コミュニティーがなくなってしまった。私は円満な「和」というものは、つながる・回る・車輪の「輪」だと思っています。これを成就せずに、平和の和だけ言っていたのでは、あっちを向いている人は自主的にその輪に入ってくない。そういう人が輪から外れないようにするにはどうすればいいか。解決策は簡単です。その人に自信をつけ

^{*}やねだん (鹿屋市串良町柳谷集落)

てあげればいいのです。以前台風が来た時に、そういった人が真っ先に出てきてびしょ濡れになりながら作業していたことがありました。それを見て「彼は輪に入って来る。大丈夫だ」と私は確信しました。

◆哲郎の法則

やねだんに行くときは「哲郎の法則」という法則を必ず守っています。

まずは農家や畜産農家に行って、牛の便がついても平気な服装で集落を回ります。その時に必ず腰にタオルをかけるのです。人が働いているところに歩み寄って、ありがとうって肩をたく前に、顔を拭いてあげるのです。私は保護司もしていて、こんな体験をしたことがあります。父親のテーブルを平気でひっくり返す、シンナーを乱用していた中学生がおりました。私は「核にメスを入れなかつたら、類は友を呼ぶようにどんどん仲間に広がっていく」と思いました。私は彼が夕食を食べているところへ行きました。彼が夕食で食べこぼしたものを全部食べたことがあります。それは自分の人気取りのためにやっているわけではありません。今では、彼はすぐにご飯を置いて、私に座布団を持ってきて、そこに座らせてくれます。

皆さん、僕が言おうとしていることわかりますか？「本気」ということを言っているのです。あっちを向いている人には、命令しては絶対にだめなんです。心から信頼させ、ありがとうと言わせるためには、目線が一緒でなかつたらいけません。そこまで目線を落とせば、本人の方からどうしてこんな事をしているかということを知って教えられるのです。

◆カルテづくりがむらづくりの最初の仕事

要するに、世間を平等に観察してカルテをつくるのが、私のむらづくりの最初の仕事だったのです。そうしないと、手術も治療も出来ないし、計画も立てられないからです。やねだんでは、おばちゃんの家に行くと必ず「哲ちゃん、ちょっと待たんね、私の茶が飲めないの？」という風にお茶を出されます。お茶が出ると次は漬物や梅干しも出てきたりする。もし「いやおばちゃん、次があるから」と断ったら、おばちゃんは「私が出したのは汚いのだろうか」と思うかもしれ

ない。人が認めてくれるのはワンタイミング、ワンチャンスなのです。私は本気でやってきたのはたった2年間でした。3年目からはやねだんをどうしたらいいかということを考えました。

◆不の項目の拾い上げ

まず、不の項目を拾い上げました。不満の不、不便の不、不安の不など不の項目はどこでも山ほどありますよね。私はこれを発信させたのです。やねだんで一番先に出てきたのは、不満でした。その地で一番多かった不満を拾い上げて取り組んだのが、あの土着菌です。「哲郎、牛の垂れ流しの匂いで、洗濯物をもう1回洗わないと臭いんだよ」という声があったのです。

そこで次に考えたのは、不の項目の優先順位を決めて、これを発信した人を調整役ではなくスタッフとして、一緒に動かすことでした。そうしないと、役員・館長は発信した被害者を加害者にしてしまう。最後まで被害者と加害者も一緒にいられる雰囲気をつくるにはどうしたらいいのか。そういうことを考えるのに、リーダーは想像力と思考力が要るって私はいつも言うのですよ。

◆土着菌とは・・・

土着菌は、土着微生物で好気性微生物です。微生物は好気性と嫌気性の2種類あります。トータルで5,000種類ぐらいあります。人間にも、2,000種類ぐらいの善玉菌・悪玉菌と言われる微生物が宿っています。この世の中に微生物がなくなったら、人間も植物も生きておられません。

ですから、「私たちがバクテリアということを見直さなければいけないね」と考えてスタートしたのが土着菌で10年が経ちました。家畜の排便だけでなく、自然農業の無農薬、無化学肥料で微生物だけの土づくりから作物を作るのはどうか。終戦後のお年寄りの方や農業をしたことがある方ならみんな知っています。こういうことを私たちは有機と言っていますが、今では「オーガニック」と言います。

こうやって「自分で食べる物ぐらいは無農薬でつくろうよ」と10年前から集落でやっているだけなのです。その原点は、やっぱり土づくりです。これで不満の解決ができ、メディアが取り上げてくれたものだから、一遍に土着菌が展開しました。土着菌はやねだんが発祥の地なのです。